

意見陳述書

2019（令和1）年8月9日

佐賀地方裁判所民事部合議2係 御中

原告 深谷 敬子

1 はじめに

福島第一原発から南へ7キロの福島県富岡町に住んでいた深谷敬子と申します。今、私は74歳で、郡山市の復興市営住宅で生活しています。私たち原発避難者の苦しみや原発の怖さを知ってもらいたくて福島から来ました。

2 原発事故前の生活

私は、福島県郡山市で生まれ、中学校卒業後すぐに東京に出て専門学校に行き、美容師になりました。

22歳で夫と結婚し、翌年、長男が生まれたのをきっかけに、夫の地元の富岡町に自宅を新築して引っ越しました。やがて、二男が生れ、33歳で福島県浪江町のショッピングモールに美容室を出店し、開店のために借りた借金の返済と家族の生活のため、寝る時間を削って働いて、6、7人の従業員を雇うくらいの規模にまでしました。

60歳になった平成16年、私は浪江町の店を長男に譲って、新しく自宅の敷地内に美容室を建てました。自分の美容室には老後の夢と希望がいっぱい詰まっていました。美容師という仕事が好きだった私は、80歳まで働こうと思っていました。

火曜日の定休日と三が日以外は休まず働き、お客さんは、近所の人か

ら、浪江町の時代のお客さん、双葉町や大熊町から通ってきてくれる人もいました。

毎日お客さんと接しながら髪を扱う時間はとても楽しく、笑いが絶えませんでした。次のお客さんがいない時には、髪を切った後も一緒にお茶をすることもありました。

富岡町に建てた自宅は、8LDKの2階建てで、たくさんの人を呼べるように、キッチン・リビング・ダイニングを繋げるように改装したり、対面式キッチンにしたりとこだわって手を加えていました。

原発事故前は、友人や知人を呼び、居酒屋のように手料理を振舞って賑やかに楽しく過ごしていました。夫とは、当時、すでに死別して10年以上経っていましたが、夫と建てた家と、好きな仕事と、親しい知人友人と過ごす時間があり、毎日が満ち足りていました。

3 原発事故の発生と避難

あの地震が起きた時、私はお客さんのパーマをかけていました。揺れが収まったとたん、消防の人から「西に逃げてください」と言われました。この時はすぐに戻れると思い、ひざ掛け1枚をもって逃げました。

それが私の避難の始まりです。

そして、富岡町は人が住めないところになりました。今まで生活していた一つの町から、数時間の間に誰もいなくなるのです。想像できますか。今まで生活していたすべてのものを捨てて逃げるのです。何も知らされることもなく。

自宅から逃げ、大熊町で暮らす長男夫婦と大熊中学校に避難しました。

翌12日の朝、突然「バスが出ますから逃げて下さい」と言われ、訳が分からないまま、田村市常葉町の体育館に移動しました。2000人を超える避難者ですし詰め体育館は、防寒具も床に敷くマットもなく、食べ物も薄い食パン1枚でした。寒くて、お腹がすいて、生命の危険を

感じました。

そこからは、民間の宿泊施設、知人の家、弟の家、借り上げアパートと、転々としました。ですが、どこも、落ち着いて生活ができるところではありませんでした。

やっと、郡山市の復興公営住宅に入居できた時には、すでに10回以上の引っ越しをし、事故から4年以上が経っていました。入居したときには、やっと死に場所が見つかったと思いました。

それでも、復興公営住宅は狭く、富岡の自宅とは比べるべくもありません。住民との関係にも気を使い、避難者であるということを隠して生きています。避難者が来て病院などが混んで迷惑しているという話を聞いたり、賠償金をもらって贅沢しているという偏見の目で見られるからです。面と向かって「避難者とは付き合えない」と言われた人もいると聞きました。

親しい友人知人とも離れ離れになり、新しい人間関係を作ろうにも、この年では難しいことばかりです。富岡町で生活をしていたときの、あの自由で楽しみがたくさんあった生活はなくなってしまいました。

- 4 私の家は、今でも帰宅困難区域です。一時帰宅で家に帰ると、田んぼも畑も黒いフレコンバッグが山のように積まれ、前の家をイノシシが3頭歩いて、牛が群れをなして草を食べていました。不気味で、別世界でした。家の中は、動物のうんちがいっぱいで、冷蔵庫には虫が湧き、黴臭さと獣臭さが混じった何とも言えない異臭が漂っていました。何も持ち出すことができなかつた自宅には泥棒が4回も入りました。一つ一つ買いそろえた家財道具も、すべてダメになってしまいました。

80歳まで働こうと思っていた美容室は、屋根が抜け落ち、壁も崩れ、床は草が突き破って生え、もはや建物とは言えなくなりました。営業損害の賠償は、私が高齢だという理由から、事故から4年で打ち切られま

した。

5 さいごに

原発事故にあう、原発で避難をするということがどういうことなのか、分かっていただけたでしょうか。

避難することによって人生がくるってしまい、根なし草のような生活をし、いまだに立ち直れない人がどれほどいることか計り知れません。私もその一人です。

終の棲家として広くて住みやすい家にしよう、友人がたくさん集まれる家にしようと思って造った家は失われ、付き合いのあったご近所さんもお客様も、多くは、今もどこにいるかわかりません。美容師の仕事がしたくても、高齢の私を雇ってくれるところはありません。

家も、仕事も、友人関係も、40年かかって築き上げたすべてのものを原発事故のために失いました。

死に場所が見つかったと喜んで入ったはずの復興住宅も、心安らかに過ごせるところではありませんでした。生きる喜びもなく、どうしたら心静かに暮らせるかを模索する日々です。避難者に安住の地はないのだと思います。

皆さんに言いたい。これから先、原発のことを聞かれたら声を大にして言ってほしい、絶対に「原発はいらない」と。

すべてを奪った原発が憎いです。

以上